

都市の緑地マネジメント

～茨木市 元茨木川緑地リ・デザイン～

稲熊 高子

◎元茨木川緑地の歴史 ～高度成長期に作られた全長5kmのグリーンベルト～

茨木市は、市の農産物の発展に大きく貢献する一方で度々氾濫を起こしていた茨木川を、昭和16年に安威川と合流させ廃川とした。昭和45年、当時荒れていた廃川敷きを「元茨木川緑地」として“グリーンベルト化”する方針が出される。そして、昭和50年から昭和63年にかけて、全長約5km約13haの緑地が整備され、中心市街地に長大な緑地が誕生した。



廃川前の様子（昭和初期撮影）



氾濫した茨木川（昭和10年撮影）



全長約5kmの元茨木川緑地（平成31年撮影）

◎市民が関わり実現していく「元茨木川緑地リ・デザイン」

市制70周年を迎えた2018年、老朽化した施設のリニューアルを単に行うのではなく、市民の様々な活動に利用できる場として「リ・デザイン」に取り組む方針が示され、市民ワークショップ等が開かれ、リ・デザインの基本方針等が検討された。

（元茨木川緑地リ・デザイン検討フロー図）



◎活動・文化を育む仕組みづくり「モトイバミーティング」を実施

2019年からは、活用や植栽に関する検討、活用の試行イベント等に市民参加型で取り組む「モトイバ・ミーティング」が進められている。



木陰と日なたの温度の違いをサーモグラフィーで測定するイベント「モトイバ温度実験」（2019年9月14日）



市民と情報を共有するニュースレターや散策マップ及びリ・デザイン計画紹介リーフレットを作成

◎利活用空間の創出「市民ワークショップ」を実施

さくらまつの会場や川端康成文学館前等、元茨木川緑地の利活用空間について検討する「市民ワークショップ」が開催される。

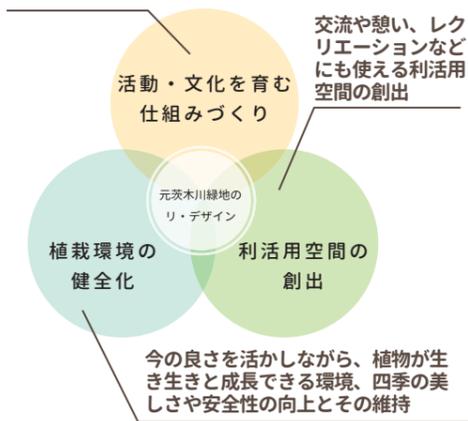


市民ワークショップの実施（写真・図は2018年のもの）

◎リ・デザインの基本方針（「元茨木川緑地リ・デザイン計画（2018年）」より）

元茨木川緑地が、市民の様々な活動に利用される場所となり、文化を育む緑地を目指す「活動・文化を育む仕組みづくり」、利用を支える基盤の環境である植栽の質を向上し維持することを目的とする「植栽環境の健全化」、歩行空間に加え交流や憩いなどの利用しやすい空間を生み出す「利活用空間の創出」の3つを基本方針として、リ・デザインに取り組む。

市民が様々な活動で、文化を育んでいく緑地の運営



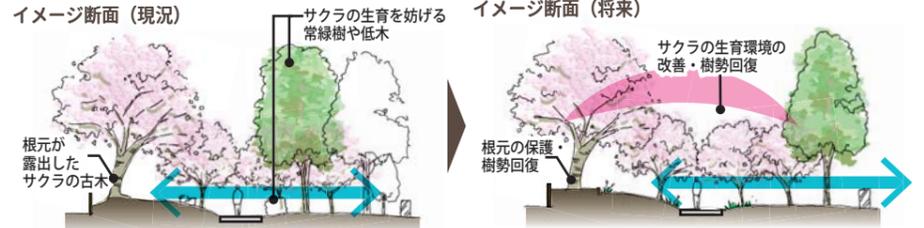
◎植栽環境の健全化「植栽管理ガイドライン」の作成

都市の緑地として、景観・季節感の向上、生活環境の安全性の確保や自然災害時のリスクの軽減、利活用に適した環境の視点から、健全な植栽環境づくりを目指して「植栽管理ガイドライン」の作成に取り組まれている。

ランドスケープの専門家、実際に緑地の管理に携わる造園実務者を交え、管理方針等の検討を進めているとともに、全域の樹木調査にもとりかかっており、2021年の「植栽管理ガイドライン」完成を目指している。

（植栽管理の考え方「元茨木川緑地リ・デザイン計画」より）

- 残すべき樹木を見極めながら、景観・季節感の向上や樹木の生育、生活環境の安全性の確保や、自然災害時のリスク軽減の視点から、樹木密度管理による健全な植栽環境づくりを行う。
- 利活用にも適した健全な植栽環境づくりを行う。（例えば、花見利用に適した植栽環境、自然学習に適した植栽環境など）



望ましい植栽環境	桜が楽しめる	明るくて見通しがよく	四季を楽しめる	利活用できる広場などの空間がある	今のまま
現状の課題	日が当たらない 病気・害虫 老木化 土が固まっている	木が多すぎてうっそうとしている 園路沿いに常緑樹が多い 目線の高さに樹木が茂っている	落葉樹と常緑樹が混ざっている 日が当たらずにうっそうとしている	木陰が広々として使えない 園路沿いに植栽があり緑地に入れない	倒れると危険な高さ 枯死、衰弱 土が著しく流れ、木が倒れている
手法例	常緑樹の伐採 桜の開引き 病気の治療 樹勢回復 土壌改良 樹木の育成 後継木を育成し、更新 桜を際立たせる植栽	目線の高さに樹木の伐採 生垣の撤去や縮小 常緑樹を減らす 樹木の開引きや枝打ち 樹形の縮小	【春を楽しむ場合】 ※「桜を楽しむ」と同様 【夏を楽しむ場合】 夏に木陰ができる木を採り、開引く 【秋・冬を楽しむ場合】 紅葉する樹木、秋に実がなる樹木を残して、樹木を開引く 落葉しても美しい樹形を育成する 紅葉する植物を追加	樹木を開引く 園路との段差をなくす 芝生、舗装、ウッドチップ、ウッドデッキなどを敷く ベンチなどを置く	高くならない高木の剪定 土留め柵の設置 枯死、衰弱した樹木を共存できない樹種を撤去 樹形の再生（高さを抑える） 病気の治療